
ボーダーライン-Boys & Girls-

夢町斗備

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボーダーライン - Boys & Girls -

【Nコード】

N8166J

【作者名】

夢町斗備

【あらすじ】

超能力が当たり前になった世界。

瑞原香織はこれもまた当たり前に学校に通う。二人の親友も共に。平和だった三人。しかし偶然なのか必然なのか三人はトラブルに巻き込まれていく。どうする香織！？お前の明日はどっちだ！！

？ 朝、登校中・・・。

超能力。

今やこの世界の常識となったモノ。

ある年を境に爆発的に増えた超能力者。さながら細菌感染のように世界中に伝播していった。

かく言う僕も超能力者。便宜上超能力とは呼んでいるが僕のは特殊体質と言い換えても良い。

能力名：『無貌の塊』（アンチボディ）

伸縮自在の身体。質量保存の法則を全く無視した変形を行える。自分の事ながらとんでもない代物だ。アメコミのヒーローにも同じような能力を持っている奴がいるらしい。アメコミ好きの親友が言っていた。ヒュー・ファンタスティックウー！グレイトツ！などとはよくはやし立てられたものだ。そこでその親友がコイツ。

「ン、どうしたよ香織ウ？……じーっと見られると照れちゃうぜ？」

香織ってのは僕の名前。瑞原香織。性別は男だ。しかし不本意だがよく女に間違われる。女顔だっというのは嫌だが認めよう。

でコイツが親友の西條兼虎。通称ジョー。アメリカ人の父親と日本人の母親の血を引くハーフだ。金髪碧眼の天を衝くような巨人身長193？。快活でお喋り好きなハツピーボーイ（イケメン）。運動神経抜群。帰宅部だが運動部から助っ人要請が度々ある。現実にもあるんだなそういうの。しかも能力はランクA-。最低ランクはEで僕の能力はC+だ。当然女子にモテてモテてモテまくる。この歳になってラブレターも告白の一つも経験していない僕にとっては羨ましいことだ。小さかった頃からの仲良し三人組。三人組っていうことは三人。そう、もう一人僕には親友がいる。

「あら。情熱的に見つめ合う二人……禁断の愛ですか？」

にこにこ笑いながら素っ頓狂なことを言うコイツが親友其の二。

ふわふわの栗毛をヘッドフォンをカチューシャ代わりにして纏めている。公柴まりあ。通称は……まりあ。そのまんまだ。大財閥のお嬢様で空前絶後の大金持ち。容姿端麗。頭脳明晰。全国模試10番以内を常にキープ。能力は驚愕のランクS。完璧超人かと思われるまりあだが弱点が一つある。運動能力が皆無に等しいのだ。普通に歩いているだけでも何も無い場所でこける。某漫画風に言えばへちよい奴なのだ。どこか残念というか放っておけないというか保護欲をビンビンに刺激する奴なのである。別に僕とジョーはそんな欲なんかで友達してる訳じゃないが。

「そんな訳ないじゃん、まりあ。ただジョーの顔がイースター島のモアイに似てるなあ、って感心してただけだよ」

「異議アリ」

「なにかね、ジョーくん？」

「オレをあんな石の塊と一緒にすんじゃねーヨ！ホラ、良く見口！こっちの方が良いオトコだろうがヨー！！」

ずいっと僕に顔を近づけてくる。鼻息が荒い。むさっ！

「んふふふふ　イイですわ」

隣でまたまりあが顔を輝かせている。

「まりあ……後でちよつと話し合おう……」

「何をです？」

きやるっ。可愛らしく首をひねるまりあ。……イイ。い、いや誤魔化されるな僕っ。

「どうしました？急に頭を抱えて唸りだしたりなんかして……頭でも痛いんですの？」

おっと無意識のうちに過度なジェスチャーをとっていたようだ。心境が表に晒されやすい。それが僕。それにしてもこんな些細なことを本気で心配してくれるまりあはいい友達だ。今だってほら不安で泣き目になってる。

「大丈夫だよ。ちよつと狼になってしまうのを抑えてただけだからもう治まった」

「えっ、香織って変身能力持ちでしたのっ！？でも狼だから獣化能力っ！？」

「そう実は僕……複合能力持ちなんだ。ランクはSSS。何でも出来る。神様と同位の存在さ。内緒にしてたのはゴメン。口止めされてたんだ、国に。世界のパワーバランスが崩れるってさ。今まで何度となく命を狙われてきた。僕のことを気に食わなく思っている連中が山ほどいる。その中の一つの組織がまりあ、お前を狙っていた。でも心配しなくていいよ。そいつらはもう既に僕が殲滅した。許せなかった。僕の大事な親友に手を出すなんてっ！……こんなことは一度で十分だ。僕は姿を消そうと思う。まりあ。お前に迷惑がかかることは絶対に無い。これからずっと僕が陰から守ってるから」

「そんな……香織！行かないでっ！」
涙を流しながら僕の胸にしがみついてくるまりあ。そのまま小さな拳で胸を叩く。

「痛いよ、まりあ……心が……痛いんだ」

乱暴にまりあを突き放す。辛い。痛い。でも……でも……！

「まりあ。お前は紛れも無く僕の親友だったぜ。ありがとな今までじゃあ、さよならだっ……！」

振り返ることは無い。すすり泣く声を背中に残そうとも。これでいいんだ。これで良かったんだ。

……完……

「オ……イ……。何やってんだヨ。大根役者どもが下手な芝居してんじゃねーってノ」

少し離れたところで僕らの珍行動を見守っていたジョーがようやく声をかけてくる。こころなしか顔が引きつって見えるのは気のせいだろう。

「いやー、ほんの気紛れだったんだけどまりあが思いの他熱演してさー。こっちも気分が入ってしまった」

「息ぴったりでしたわね 相性バッチリ！」

「バッチリだ！イエー！」

「イエーですわ」

まりあとハイタッチ。高さもバッチリ！女の子とハイタッチの高さが同じというのは考え物なだけど。

「ハア。オマエラ仲良いナ」

少し不機嫌そうに嘆息するジョー。

「お芝居もいいが、登校途中だろうガ。遅刻すんぜ？」

言われて腕時計を確認。……！ヤバッ！！

「おいおいおい、やばいよ。走らないと間に合わないじゃん。いや、走っても間に合わないんじゃないかコレ！？」

「ぴんちですわ」

「だから言った口。うら、走るゼエ！」

ジョーに後ろから尻を蹴飛ばされながら僕とまりあは全速力で学校へ向かう。だから聞き逃した。走るのに必死だったからジョーがぼそりと言った独り言を聞き逃した。

「チエツ……今度はオレも仲間に入れろよナ」

泣き言を滅多に言わないジョーのレア発言だったのに。

？ 朝、登校中・・・（後書き）

超能力大好き夢町です。 ロマンですよね。

この物語はテーマとして『友情』を掲げています。

三人のどたばた友情物語をぜひ楽しみにお待ちください。

？ 昼、雑談中…。

きーんこーんかーんこーん……。

ありきたりなチャイム音と共に生徒がざわつき始める。休み時間。生徒達のとつての憩いの時間。とはいっても休み時間など名ばかりで休んでいる奴など圧倒的に少ない。授業中のほうが休んでいる奴が多い。まあ、それは肉体的な話。精神面では十分に休めるのが休み時間なのだろう。

「うつし、香織ウ。メシ食いに行こうぜ」

今は昼休みだ。

「んー。良いよ。今日は学食？購買？それとも弁当？」

うーむ、と腕を組んで考えるジョー。歯軋りをしながら悩み悩みぬいた拳句、

「まりあー、お前はメシどーするヨー？」

窓際の席で教科書を机にしまっているまりあにまる投げした。

「私ですか？」

「アア、お前ダお前。エキセントリックヘッドフォン娘」

軽く頭を傾ける。まりあは少し考えているようだ。10秒程機能停止してからぽんと手を叩いた。どうやら何か閃いたらしい。

「それなら屋上でお昼ご飯を食べましょう。今日は天気が良いですし。あつたかくてぽかぽか夢気分ですよ」

ぱあつ。笑顔が咲く。能天気な奴め。……可愛いなあ。

「でもサ。それにしても何か買わなくちゃダロ？だってオレ今日何も持ってきてねーぜ？」

「僕も右に同じ。まりあだって今日は弁当持ちじゃないだろ。月曜日だから」

まりあは妙に几帳面な性格をしていて、自分の中で何らかのルールを創っていることが多い。これもその一つ。月・水・金は学食が購買。火・木・土は公柴家専属の一流シェフが作る高級お弁当。シ

エフにも休みは必要だというまりあの主張だ。

「執事に何か持ってこさせますので大丈夫です」。特別な用事は何も無いと言っていましたので」

「っておい！シェフは休ませるのに執事はフル活用かよっ！」

「だって執事ってそういうものじゃないですか」

金持ちの感覚は分らない。執事なんてものに一切関わりの無い庶民の僕にとっては全く別次元。金持ちのまりあがそういうものだと断言するのだから執事っていうものはそういうものなのだろう。

「オッ、そりゃイー！たまにはイーもん食いたいシー。しかもオレ様ただいまハングリー注意報発令中なのヨ。いっちょウマイもん頼むぜ！まりあ！！」

「うん。任せなさい。ふふ」

ピポピポパパ……プルルル。

「じゃ、まりあ。僕達先に屋上で待つてるからさ。執事さんによるしく言っておいてくれ」

まりあは電話をしながらアイコンタクトで返事をする。僕は朝の仕返しとばかりにジョーの尻を訳も無く蹴って屋上へと向かう。ジョーは昼飯への期待で頭がいっぱいのように僕の蹴りになど気付きもせず半ば夢心地のままゆらゆらと歩いていく。コイツの食への執着心と忠誠心は半端じゃないからなあ。

間々。暫くの間々。

「ウメエーッ！これは美味スギルッ！！こんな美味しいモノ食ったことねーぜ！アアアアアア！オレの満腹中枢が満たされていく！まだまだ食っていたいのにオレの腹の容量がそれを許してくれないッ！腹がいっぱいダーッ！っつか本当に腹がいっぱいあれば良いノニッッッ！！！」

叫びながら食っている……。

物凄い光景だ。僕とまりあはただ呆然とジョーの化物じみた食事風景を見ている。

まりあの執事さん（桎崎さんというらしい）が持ってきた昼食は

想像を絶していた。持ち運び式のシステムキッチンを屋上に設置した後その場で調理を始めたのだ。柗崎さんは滑らかな手つきで様々な野菜を切断していき、霜降り肉を厚く切った後完全に火が通らない絶妙な加減でレアに仕上げ、白身魚を三枚におろした後僕には良く分からない手順で瞬く間にムニエルに仕上げた。これが僕には一瞬の出来事に思えた。鮮やか過ぎる手さばきは僕の脳の間を痺れさせてしまったみたいだ。

僕は調理を終え帰路につこうとする柗崎さんに声をかけた。

「こんな美味しそうな料理群を作っていただきありがとうございます。ちよつと疑問なんですけど柗崎さんって料理人か何かだったんですか？」

柗崎さんはサングラスを光らせながら、

「これぐらいのこと……執事ならば造作も無いことです。それでは良いお食事を」

それだけ言つて静かに去つていった。うーんミステリアス。なにかしらの能力だろうか？

濃厚な霜降りステーキをぺろりと平らげたジョーがようやく満足したようで腹ごなしの世間話を始める。

「そついや、最近話題の連続銀行強盗……知ってる力？」

銀行強盗？

「なんだ知らないの力。じゃ、まりあハ？」

まりあも首を横に小さく振つて否定。

「二人とも流行に鈍いんだナー。いいか、なら教えてやる」

啞えていた爪楊枝をあさつての方向に吹き飛ばし再び話し始める。「始まりは一週間前ダ。商店街の端にある第一銀行あるだろ？あそこが襲われたんだ。襲われたっていったのハ、マジで語弊じゃない。真正面から正攻法な銀行強盗。しかし特異な点のはのんびり金を略奪した後、警察が来るまでわざわざ待つてやがるつてコトダ。そんデ警察が来てから堂々と正面突破。能力にモノをいわせて警察を蹴散らして帰るんだ。傍若無人の大胆不敵。それをもう二度も繰り返し

てるんだっテいうからマジ半端ねーよナ」

まくし立てるように一気に語ったジョーは大きく一つゲップをした。グエエエツプウ！汚ッ！！

「二度……。つーことはABC銀行と第二銀行も襲われたのか」

「うんニヤ。襲われたのは最初に言った第一銀行ト、それかラABC銀行・水州銀行の順」

「水州銀行？なんだその凄腕ヒットマンが入金を指定してくるような銀行は」

「新しく出来た銀行ですよ。香織ちゃんは出不精の引きこもりだから知らなかったかもしれないですけどね」

まりあが簡単な説明。さりげなく侮辱された気がするが。つか意味が重なつてねーか？

「だからナ。今香織が言つた第二銀行。この街には全部で四つの銀行がある。それで襲われてないのが第二銀行ノミ。そこから推測されることは一ツ！分かるよナ？ズバリ次に襲われるのは第二銀行ダ！！しかもその予想はマジ当たってたんだヨ」

ジョーがまりあと僕の頭を引き寄せる。お互いの顔が密着する位置だ。右はぶにつ、左はムサツ！

「……ここだけのハナシなんだけど。昨日ナその第二銀行に脅迫状……いや予告状が届いたんだヨ。指定された日にちはナント今日！だから放課後ちよつと見にいかな！？マジ興奮悶絶モンだぜ！！」
「や、ちよつと待てよ。なんでジョーがそんな機密事項を知ってるんだ？」

「アア、それなら昨日立ち聞きしタ。警察官が三人ぐらいで話してたトコをナ」

おいおい、道端でそんな重要なことを垂れ流してんじゃねーよ警察さんよー！

「でも危なくありませんの？」

まりあがそれほど興味も無さそうに言いながら重箱の隅に残っていた厚焼き玉子をばいっとジョーの口に放り込む。

「もぐ……いや大丈夫じゃねーかな？そいつら何故か警察しか相手にしねーんだ」

ということは警察に恨みでもある奴らなのか？それとも社会に反発したいだけのいかれた強盗？金が必要なだけならわざわざ警察に喧嘩ふっかけるような真似しなくてもいいもんなあ。

「今日は何も予定はありませんけれど……あまり気乗りしませんわ」僕も同意見。そんな厄介事に無闇に首を突っ込むほど僕は馬鹿じゃない。君子危うきに近寄らず。別に僕が君子ってわけじゃない。触らぬ神に祟り無し、と言い換えてもいい。

「なんだなんだ。ノリが悪いナー！ナア、今日はオレのお願いを聞いてくれ！一人で野次馬なんてマジ虚しいジャン！？マジ寂しいジャン！？オレの親友はそんな血も涙も無い奴らじゃなかったはずだ！香織ウ、まりあアお願いだあああああ……」

「うわっ！足にしがみつくなあっ！」

ムサッ。キモッ。大の男に下半身を抱きしめられるほうの気持ちにもなれや。つか本当に大の男、巨人だし。うわっ泣き始めやがった！……冷静に見ると大人のマジ泣きってすっげー見苦しいな。

「ほら、落ち着いてジョー」

「えぐっ……うう……一緒に行こうぜエ……」

嗚咽交じりにそれでもなお懇願し続けるジョーをまりあが優しくなだめている。ジョーは感情が豊かで豊か過ぎてたまーに爆発してしまうのだ。

「あ……分かった、分かったよ。一緒に行けばいいんだろ。放課後で大丈夫なのか？」

「エッ、マジでエッ！いやー香織はやっぱ話がわかるなア。銀行強盗は5時襲撃だから放課後で十分に間に合うぜ。って警察が言うてタ」

変わり身速っ！

まったく面倒くさいな。でもその強引さがジョーのいいところでもある。自分の意見を力強く主張するのは僕とまりあには絶対に出

来ないことだ。人は自分の欠けているところを埋めるかのようにそれを持っている人に惹かれる。僕とまりあも惹かれたクチだ。

それにしても僕の流されやすさは考え物だ。流されやすいこと流し素麵の如く。自分の意見なんてものが皆無だ。だからこそいつも隣に居てくれる二人の親友が宝物、一番大切なものである。それはジョーとまりあにとつても同じ筈。三位一体。共依存。僕らは互いに依存し合って生活している。

「仕方ないですね。私も付き合いますわ」

きくくんかくくん……。

まりあが当然のように言って予鈴が鳴る。

「それじゃ午後の授業もいっちゃハッキリスッキリ頑張りますか！」
三人一緒にうーん、と大きくのびをして屋上を後にする。晴天快晴。リフレッシュした心で、睡魔と激戦を繰り返す午後の授業をなんとか耐え切っていいこう。

放課後……どうにもならなければいいんだけど。

結局僕の希望的観測は見るも無残に打ち砕かれてしまう。それをまだこの時は知らない。つーか在り来たりだなあ、この表現！

？ 昼、雑談中…。（後書き）

ようやくもって次から敵キャラ登場！バトルは……？
しかし二話目にしてジョーが酷い有様に。こんなはずじゃ無かった
のにな？これじゃただの情緒不安定な似非外国人じゃねーか。

？アフタースクール・カルテッド

放課後。ジョーとの約束の通り三人で駅前商店街の真ん中にある第二銀行に向かうことにした。口では四の五の言っているもやっぱり僕も高校生。少しも好奇心が無かったとは言えない。若干楽しみでもある。

てくてくと他愛も無い話をしながら歩いていくとほんの20分程で第二銀行に着く。只今4時30分。襲撃予定時刻まであと30分。暇を持て余す時間だ。

「喫茶店にでも入りませんか？まだ時間もあるようですし」

まりあの提案で第二銀行の正面に位置する喫茶店に入る。『喫茶アヴリオ』。入店前にちらつとみた立看板によると紅茶と珈琲が自慢の喫茶店であるらしい。辺鄙な街角の喫茶店に味は期待しないがどれ程の腕なのかは気になるところだ。

ちゃらん。ウィンドチャイムが清涼感のある音を立てる。

お、なかなか。味があるというか何だか懐かしい感じ。木製の艶のあるテーブルセット。カウンターにはあごひげを蓄えた壮年の男性が立っている。胸に小さなプラスチックの名札。見ると『店長』と書いてある。店長自らカウンターで接客とは従業員不足なの

だろうかこの店は。

「いらっしやいませー」

愛想良く僕らを迎え入れる店長。

僕はホットダージリンを、ジョーは店長お勧め珈琲を、まりあは三種のベリータルトをそれぞれチョイスして注文した。

「藤ちゃん、注文入ったよー三種のベリータルトー！」

店長がカウンター奥の戸を開けて呼びかける。恐らく厨房があるのだろう。

再びメニューを広げる。それにしても街角の喫茶店にしては軽食もデザートも種類が豊富だ。是非ともまた時間のあるときに訪

れてみたいものだ。

すぐにホットダーズリンと店長お勧め珈琲がウェイトレスによって運ばれてくる。先程は従業員不足とも思ったが思い違いだったようだ。

「こちらホットダーズリンと店長お勧め珈琲でございますー。今日の珈琲はキリマンジャロ。タンザニア産のコーヒーの日本での呼称、強い酸味とコクが特長。・野性味あふれる・と評されることが多い、深い焙煎では上品な苦味主体で浅く中煎りとは違った風味が楽しめる珈琲となっておりますー。因みにWikipedia参照でございますー」

手元のメモ帳を見ながら流暢に棒読みで説明する。

いやー、なんとも従業員に教育が行き届いていない。でもここまで堂々とやられるとかえって清々しい。スマイルは満点。そのスマイルに誤魔化されてしまう客も多いだろう。

ぺこりとお辞儀をしてバックヤードへと下がっていくウェイトレス。完全に姿が見えなくなった後でお前馬鹿かつ、という青年の声と共にスパーンと快音が響く。ふぎゅっ、というウェイトレスの声も聞こえた。やっぱりさっきの対応は不味かったのだろう。厳しい先輩にどつかれているに違いない。南無ー。

「むーまあまあだナ。ちやちい喫茶店の珈琲にしてはナカナカじゃねーノ？」

珈琲を啜りふーっと一息つく。

僕のホットダーズリンも中々に美味しかった。鼻先から抜ける香りが気分を落ち着かせる。

一人何にもありつけないまりあが頬を膨らませている。とんとんとんとんとん。指先でテーブルをリズム良く叩いている。とんとんとんとんとんとんとん！だんだんとビートが速く力強くなっていく。まりあは表情・口調、外見には出ないものの結構短気だ。

叩くビートが速すぎて長音に聞こえるようになった頃にようやく

まりあの注文したタルトが運ばれてくる。甘酸っぱい香りが辺りに広がる。

「んゝ やつときましたわゝ」

待ちかねたように瞳を輝かせるまりあ。無類の甘い物好き。

「もく……もく……！！うわっ 美味しいっ！」

ありや。普段驚いたアクションを取らないまりあが目丸くさせている。これは珍しい。

「エッ、マジ！？そんじゃーオレにも一口くれヨ！」

ジョーが伸ばしてきたコーヒースプーンをその手ごと叩き落とすまりあ。

「それは……ないよね？」

うわー目がマジだ。こと自分の好きなことに関しては譲ることを知らない。ジョーが気圧されてすごごと引つ込み自分の珈琲をちびちびといじけたように啜る。巨人が少女に負けた。絵面としては面白いがジョーのあまりの落ち込みぶりに僕も同情せざるを得ない。そんなこんなで時刻は間もなく5時。僕らは会計を済ませ 学生にも良心的な値段設定だった 第二銀行の正面、ちょうど公園そのこのベンチに三人で腰掛けた。右からジョー、まりあ、香織の順だった。この順番が伏線になるなんてことは絶対ないので覚えていなくとも結構である。要は第二銀行の正面に三人はいるということと言いたいのだ。

ちっ、ちっ、ちっ、ちーん。5時になりました、暗くならないうちに早めにお家に帰りましょう。

公園に設置されているスピーカーから合成音声のようなやけに機械的な放送が流れてくる。

ブウワアシャアアアアッゴオン！！

それと同時に爆発音が響き渡る。第二銀行の正面自動ドアが見る影もなく破壊されている。幸い付近に人は居なかったようだ。人的被害はないが物的被害は甚大だ。破壊された際に飛び散ったと思われる大小のコンクリート建材の破片が停車中の車やら交通標識やら

自動販売機やらを滅多やたらに破壊していたからだ。

もくもくと粉塵が満ちる第二銀行。

30秒もすると粉塵が晴れる。そこに現れるは4人の男女。男二人女二人のフイフティフイフティ。髪の毛の長い女一人が簡易的な折りたたみ椅子に腰掛け、他の三人はそれを囲むようにして立っている。リーダーなのかな？特に武装もしていないところを見ると先程の爆発は能力によるものか。てか爆発の能力なんて危険すぎるだろ！？ここでいきなり視点変更。えー、こちら銀行強盗犯側なり。

「うつちゃー、あんまり五月蠅いん苦手よ？もちつと静かに出来んかん？」

折りたたみ椅子に座った銀髪の長髪女が背後に立つ眼鏡の男に話しかける。

「出来るだけ派手にやれって言ったのはお前だろうが、ああ？」

キレ気味……のように見える。しかしこの男『丸重双也』は生来このような喋り方をする。初対面だと警戒されるかもしれないが、実際は誰より情に厚い奴なのである。誤解しないで欲しい。

そんな双也をなだめるロン毛のタンクトップ男。怒っていないのになだめるも何も無いのだが。

「少しは喋り方を直せばどう？好感度が低下する誤解につながるぞ。読者人気投票で絵も描かれななんだぜ？」

『南市雄心』は人を小ばかにしたように笑う。

そんな雄心の発言は完全に無視する三人。

椅子に座った女の銀髪を弄ぶようにくると指に絡ませるおかつぱ黒髪の着物の女。『十野部菊乃』は呆れたように嘆息する。

「まったく壁壊れたんだからいいじゃん。当初の目的が達成できればいいんスよ」

外見とは全く違う口調で喋る。4人の中で一番外的ギャップが激しい。

会話が一周してまたセリフは椅子に座った銀髪の長髪女に戻ってくる。

「それもそうにー。壁をぶちあけるんが目的なんもな。でもうつちやーか弱い女の子よー？あんまり激しんこつされるて困っちゃんー」

独特のイントネーションと訛りで個性を演出する『今枝摘姫』はくねくねと身体をひねる。

「テメーのどこが弱い女の子だ、ああ？」

「みつきーに勝てる奴なんて自然災害くらいさ。あ、違う違う前言撤回。自然災害なんかじゃ勝てないわ」

「そうだって。みつきーは無敵なんスから。スター状態現在進行形みたいなの？」

三連でツツコミを喰らう摘姫。なう、と奇声を放ちながら椅子の背もたれにもたれかかる。体重をかけすぎて後ろ向きに転げそうになるのを双也が支えた。しかし支えた手を雄心がすかさず払い摘姫は無様にも椅子ごと転倒してしまふ。ちゃっかり双也は自分が巻き込まれないように避けていた。

「な、に、す、る、ん、のー！痛いじゃんすー！！」

腕をぶんぶん振り回しながら叫ぶ摘姫。まるで子供のようになわーと喚きまくっている。

「ごめんごめん。つい出来心で」

「俺は関係ないからな、ふん」

菊乃が椅子ごと摘姫を元に戻して服についたコンクリ片をふうつと息で吹き飛ばした。

「下らないコトしてんじゃねーッス。ほら奴さんおいでましたで御座いますよ……」

ウーウーウー！

パトカー。警察が集まってくる。誰が通報したのかは分からないが随分と到着が早い。日本の警察もまだまだ捨てたものじゃない。

とこの考えはものの見事に完全に完璧に万全に十全に打ち砕かれることになる。

無邪気に笑う銀髪。不機嫌そうな眼鏡。仁王立ちするタンクトップ

プ。またもや嘆息するおかつぱ。

「そんじゃ皆さ、ゲームプレイスタートだえー！」

リーダーの発言により駒は盤を進軍する。

「委細承知」

「がんばっちゃうもんねー」

「キツイのは嫌ッスよ？」

思い思いの意見を口にしながら警察に向かっていく姿ははたから見れば無謀。

しかし彼らが負けるわけがない。

絶対的な力の前には何者さえも存在することに意味を成さないのだ。

4度目の警察攻略戦。結果としては摘姫たち4人の完全勝利に終わった。

？アフタースクール・カルテッド（後書き）

敵『今枝摘姫』。

彼女たちの目的とは？そして無敵の能力とは？
その辺の疑問はまた今度。

つーか……ジョー……お前……。

く番外くキャラクター紹介。

氏名：瑞原香織 みずはらかおる

性別：男

能力名：無貌の塊（アンチボディ）

ランク：C+

能力：身体操作。完全に質量保存の法則を無視した変形を行える。

趣味：ジヨーをからかうこと

氏名：西條兼虎 さいじょうかねとら

性別：男

能力名：物質の王（マテリアラー）

ランク：A-

能力：物質に触れることでその物質の硬性・脆性を変化させることが出来る。現段階では金属の操作は出来ないでいる。ジヨーの努力不足である。

趣味：スポーツ全般

氏名：公柴まりあ きみしば

性別：女

能力名：音秘 オトヒメ

ランク：S

能力：周囲の音の採集。及び音の放出。音の保管に脳が耐え切れないため外付けのハード（ヘッドフォン型）を携帯している。

趣味：スイーツ巡り

氏名：柎崎柳 まふさきやなぎ

性別：男

能力名：貸衣装 レンタルプロ

ランク：C

能力：他人の能力を借りることが出来る。ただし借りる対象の承認が必要。最大借用時間は1時間。

趣味：メイド服蒐集

氏名：今枝摘姫いまえだつみき

性別：女

能力名：凍源郷フロストピア

ランク：A +

能力：？

趣味：お喋り

氏名：丸重双也まるしげふたや

性別：男

能力名：倍化ブッシュ

ランク：B -

能力：？

趣味：読書・瞑想

氏名：南市雄心みなみいちゆうしん

性別：男

能力名：火輪旋風フレイムメイク

ランク：B +

能力：人体発火。身体に受ける風によって火力が上がる。炎は身体から分離可能・操作不可。

趣味：他人の能力を見ること

氏名：十野部菊乃とおのへきのの

性別：女

能力名：神吹ハイプレス

ランク：C

能力：？

趣味：着物集め

氏名：前野修まえのしゅう

性別：男

能力名：土陵外殻アンタワ

ランク：B

能力：触れた場所から円柱を作成する。触れる強さ・速さによって円柱の高さ・出現速度が変化する。
趣味：新人育成・治安維持

ゝ番外ゝキャラクター紹介。(後書き)

ちよつと息抜き。
随時更新予定。

？コンタクト・コンタクト

日本の警察も随分と様変わりした。

超能力の出現によって新たな部隊『超能力犯鎮圧専機動隊』通称・超機隊が設立される。

超能力を用いた犯罪を鎮圧するために存在する名前通りの部署である。

中でも特に危険度が高いと思われる事件にのみ出動を要請されるエリート部隊。身体面での鍛えは勿論のこと抗精神訓練も充分に積んでいる。そして何より鎮圧の為にだけにベクトルを伸ばした実戦仕様の能力。

この超機隊があるからこそ日本の治安は守られてきたのだ。正義の名の下に悪を裁く。勧善懲悪の完全な二極化。平和の象徴。絶対の正義。覆されることはそのまま悪への敗北を意味する。

「だからこそ負ける事は許されない……！」

超機隊第一隊長『前野修^{まえのしゅう}』は苦く呟く。

目の前の惨状を、有り得ないほどの力を、次々に減っていく部下を、その網膜に焼付け認識しながらも、敵わないことは自明の理、分かっている、解っている、判っている……！

赤く揺らめき視界を歪める炎の化身が前野の眼前に仁王立つ。

「よお。もしかしてアンタ隊長さん？」

酸素を取り込みばちと激しく盛る炎の腕を突きつける。熱風が前野を容赦なく牽制する。

「いかにも第一隊長の前野修である」

律儀に答える前野と対照的に炎の男『南市雄心^{みなみいちゆうしん}』はげらげらと笑う。

「やっぱり！ いかつい顔してるからゼッターそうだと思ったんだ！」
両手で拍手をして火の粉を撒き散らしながら一層激しくげらげらと笑う。

「そうだ、隊長さん。ガチンコ超能力勝負しようぜ!？」

突然の提案に前野は面食らった。しかし向こうが提案しなければこちらから勝負を仕掛けているところだ。結局は同じなのだから前野は合理的に考えることにした。

「いいだろう。その勝負受けてやる……!」

「あらー、ビックリ。やけに聞き分けが良いんですねービックリビックリ。こちとらなーんかウダウダ説教でも垂れられるのかと思ってたもん。アンタ前野さんって言ったっけ?じゃあーうーん前野、前野……うん…うん!アンタのあだ名はエノキに決定!」

げらげらげらげらげらげら!

ふざけた男だ、と前野は思う。この私を愚弄するか……!

「それではそのふざけた言動を修正してやろう……!」

「勝負開始のゴングが今鳴り響きますッ!」

軽口叩きの雄心が炎の右腕を大きく振り上げ、しなりを利用して振り下ろす!狙うは前野の頭部。防具を着けていない前野の頭は今まさに焼き尽くされそうになる。

「アンタワ
『土陵外殻』」

前野が拳で地面を殴りつける。殴られた地面はめごめごと隆起。2m程の高さの円柱を形作り、雄心の炎の腕を下方からかち上げる。思いも寄らぬ方向からの攻撃に雄心はうめき声を漏らしながら一歩退いた。ただそれでも表情はにやにやと不快な笑いは消えない。

「いやっはー。何今のー。なーんかいきなり出てきたよ。俺ってば不意打ち喰らっちゃった!」

右腕をぐるぐると回転。どうやら損傷の確認のようだ。あれだけ勢い良く回しているところを見るとそれほどのダメージは無かったか。

「今のエノキさんの能力だね?どんな能力なのさ?俺めっちゃ知りたいねー」

「お前に教える義理は無いが、先刻の不意打ちは流石に卑怯だったと私は思っているからその謝罪代わりに教えてやろう。私の能力は

『アンタワ
土陵外殻』という。お前の腕を弾いたこの円柱。これを作成する能力だ。発動条件は作成したい地点を触ること。触る強さ・速さに比例してこの円柱の高さ・出現速度は変化する。……こんなところか」

「へー。そんじゃその円柱、元に戻すときはどーやんの？」

「もう一度触ればこの通りだ」

前野が円柱をぼんと叩くと元の平らな地面に戻った。

炎を撒き散らしながら盛大に拍手する雄心。まるでマジックショーを見ている子供のようなはしゃぎようだった。

「すっげ、すっげー！！俺ってば他人の能力見んの大好き！エノキさんの能力俺が見てきた中でもかなりナイスな部類にはいりますぜー！いやー、オモシロー。そんなナイスなもんを見せてくれたエノキさんには俺のベリーナイスな能力の髄の髄をズイーツと見てもらっちゃおうかな！」

雄心が両腕を天に向けると今までより炎が一層明るく煌いた。

「俺のナ・ナ・ナ・ナイス能力『フレイムメイク火輪旋風』！今まで見てもらった

通り、俺の能力は発火能力だ。今燃えてんのは両腕だけが本気になれば全身だつてイケルぜ！アメコミのヒーローにヒューマントーチなるキャラがいんだけど、それが俺の目標なんだ！だつてさそいつさー、俺と同じように全身発火できんだけどそれだけじゃ飽き足らず空まで飛べんだぜ！？しかも太陽に近い熱エネルギーを放出できるときた。もうそれって無敵じゃん！半端ねーよな、パねーよな！な？な！？」

「……ああ。パないな」

雄心のあまりの熱心さに若干引き気味に答える前野。

ヒーローの話を熱心に語る雄心に前野は毒気を抜かれつつあった。ふざけた男だと感じた第一印象は今となつてはただの頭の悪い男に変化していた。

上手く会話を誘導していけば戦闘を避けられるのではないか。もともと戦うことは好きではない。一般人であろうと犯罪者であろう

と人を傷つけるのはいけないことだ。

前野修は全てに優しい男であった。しかしこの性格が裏目に出てしまうことになる。

「でもって俺の『火輪旋風』^{フレイムメイク}は真髄はこれからだぜ！」

ひゅー、ひゅおおおお！

突風。雄心の背後から風が吹いてくる。

否。吹いてくるのは風だけではない！風と共に火が炎が焰が火炎が火焰が舞ってくる！

避ける　不可能。防ぐ　不可能。迎え撃つ　もう遅い。遅すぎる。油断していた。戦闘中だというのに気を抜いていた。戦わないことに意識を向けすぎた。燃える。私は臆病者だ。焼ける。戦うことを恐れた。燃え尽くし。人を傷つけたくないなどと善者ぶった愚か者だ。焼き尽くす。私は……。燃烧し。何故……。焼失する。死ぬんだ……。？人間の前野修は燃えながら焼けながら燃え尽くされて焼き尽くされて燃烧しそして焼失した。正義は悪に飲まれ焼かれたのだ。

「真髄！俺の炎は風によって増幅し、そして分離する！つってもエノキさん、もー死んじやったかね？」

ぶすぶすと煙を上げる真っ黒い燃えカスに向かって陽気に話しかける。

雄心は人を殺すことを躊躇わない。必要に応じて臨機応変に対応する。進行方向に人がいれば障害物を取り除くかのように払いのける。邪魔者は焼き尽くす。雄心はそれだけの覚悟を持っている。

「結構呆気なかったじゃん。隊長名乗ってるぐらいだからもってこずるかと思っただけだ」

雄心の陰から着物姿の女が現れる。『十野部菊乃』である。

「いや。べっきーの協力が無かったら案外きつかったと思うぜ」

「そんなもんスカ？……ま、終わったんなら帰りますよ」

「あや、もー終わっちゃったの？」

「ほとんど双也が殴り潰しちゃったツスよ」

「それはそれは。暴力的だねー。マジで人気出ねーゼアイツは！」

摘姫に合流しようと歩いている彼らの足元には超機隊の隊員が転がっている。現場へ駆けつけた超機隊隊員40名。実は死亡したのは第一隊長前野修ただ一人であった。他の隊員は負傷してはいるものの命に別状は無い。前野が殺されたのはそれだけの実力を備えていたということだった。

折りたたみ椅子を道路の真ん中において座っている摘姫は双也と一緒にだった。

「ミッションコンプリートでっかん？」

満面の笑みと共に問いかける摘姫に、

「完了でっす！みつきー隊長！」

雄心は笑いながらおどけてそう言った。

その笑いは不快で下卑た笑みではなく、親愛する者に向ける安堵感の溢れる笑みであった。

？コンタクト・コンタクト（後書き）

バトルシーンは派手に行きたいですね。
がんばってみよう！

主人公勢が出てこないのはご愛嬌

……あ。今日卒業式だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8166j/>

ボーダーライン-Boys & Girls-

2010年10月10日15時25分発行